
僕らの方程式

紗々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの方程式

【Nコード】

N4754M

【作者名】

紗々

【あらすじ】

「僕」と「彼女」のフリートーク集。
各話完結式です。

初雪に関する考察

「初雪って…おかしいと思わない？」

1月も半ば、窓ガラスを凝視したまま彼女が言った。やはり眉間に皺が寄っている。一方僕は彼女がそんなことを言い出した訳も知っている。今、その視線の先ではアルミサッシの枠の中に雪が舞っているのだ。

「君がそんなコト気にするタイプだとは知らなかったよ」

ますます彼女の眉間の皺が深くなる。

「気になんかしてないわよ。だからおかしいって言ってるでしょ」
おかしいと思うことは気になる内に入らないんだろつか。心の中でツツコミをいれながら僕は読みかけの小説に視線を戻す。反論する訳にはいかない。僕の大切な昼下がりの読書時間を邪魔されてなるものか。しかし彼女はそんな僕の態度に構わず質問を続ける。

「だってその年で一番初めに降る雪のことでしょ？」

「そうなんだ」

すかさず彼女の左手が百人一首の達人の如く僕の視界から本をすつとばし、同時に僕はその右手に耳から引つ張りあげられた。

「…ぼうりよくはんたーい」

「もうちよつと真面目に考えてよ」

彼女は尖った声で言い放つとパツと手を離し、元の姿勢に直る。

僕も痛む耳を摩り、飛ばされた本を拾って椅子に座り直した。今朝購入したばかりのハードカバー本は角がひしゃげて、20ページほどまとめて折り目がついてしまっていた。果たしてその論題に、こんな目に遭ってまで真剣になるほどの価値があるんだろうか。甚だ疑問だ。

しかも彼女は何事もなかったかのように話を続ける。

「でもそれは人間が1年って概念を作ったからであって、自然界から見れば初でもなんでもないわけじゃない」

「そういう文句は僕じゃなくて最初に初雪って言葉を開発した人に言っただけだよ」

「言いたくても言えないから此処でぶちまけてるんじゃない」

「ごもつとも。僕はページの折目を直し、読んでいた箇所を広げた。3行読んだところで閉じた。今ですっかり気が削がれて全くと頭に入っていない。仕方ない、気が済むまで付き合っただけか。諦めて彼女に新しい問題を提示する。」

「それじゃあ君の考えだと、初夢もおかしいってことになるのかな」「そうね」

彼女は短く答え、少しの間思索した。

「夢は必ず毎日見るモノだもの。今のうちに時間の概念ができる前の人間だって見ていたはずだし、その彼等は初夢を初夢と意識していなかったでしょうね。同じ人間なのに現代人が気にするのは不平等だよ」

何が不平等なのだろう。それより個人的な趣味の時間を奪われた僕にもその気持ちを一滴でもいいから分けてほしい...と思った時、彼女はついとこちらを向いた。

「そもそも夢は生体的な反応の一つなわけだから、人体のしくみから考えれば生まれて最初に見た夢のみを初夢と呼ぶべきよ」

「そんなの覚えてる訳ないだろう。そう思いながら彼女の愛らしくつきでた唇に目が行く。彼女のそれはふつくらしているとは言えないが、とても綺麗な形をしている。」

「ファーストキスは？」

不意に口について出た質問に、彼女はちょっと口を尖らせる。彼女の唇はこの癖のおかげで柔軟性を忘れてしまったに違いないと思った。

「私は初雪や初夢が毎年あるのがおかしいと言ってるの。それは人生に一度きりじゃない」

「なるほど」

彼女はふっつと溜め息をつく。まだまだ語り足りない様子だ。

「じゃあ初詣は？毎年やるものじゃないか」

「それは人間が勝手に決めて勝手にやってるだけじゃない。神様なんて所詮人間の妄想の産物よ」

ここまで言われるといつそ清々しいな。

「じゃあ君は初詣に行かないの？」

「愚問ね」

「他の行事も興味が無いんだ？小さい頃七夕とかやらなかった？」

「覚えてないわ」

思想の自由が法律で定められている国とはいえここまで極端な人も珍しい。ということとは…

「クリスマスも然り」

先を越された。

彼女は席を立ち、珈琲をいれはじめた。それに砂糖をどばどばと放り込む。無論、どちらも彼女ではなく僕がセールで購入したモノである。彼女は激甘珈琲を手に席に戻り、先程までとは逆の足を組んだ。ショートパンツの裾から白い太股が露になる。僕は頼杖をつき、そこから目を反らすこともしないまま話を続けた。

「クリスマスはアイツと過ごしたんじゃないの？」

キツと睨まれた。

「まさか。アイツもバイトだったし」

アイツとは僕の唯一の大学友達にして彼女の彼氏を努めるつわもの君のことだ。健康的で爽やかなスポーツ青年である彼がこの彼女と二人きりの時何を話すのか、大学2年が終わろうとしている今に至るまで謎のままである。

誤解しないで頂きたいが僕と彼女は恋人同士なんかでは断じてない。あくまで『友達の彼女』と『彼氏の友達』という繋がりなのだ。なのにも関わらず、奇異なことに彼女は、僕が根城にしているこの空き部屋に度々現れ、僕の至福の時間をぶち壊すべく様々な理論を展開する。勿論アイツの了承は得ている。

しかしアイツ、クリスマスは彼女と過ごすからバイトは入れない

とか言つてなかったか？彼女のこの様子だとはぐらかされたかすっぱかされたかしたのか。憐れな。

「大体何が楽しくてよその国の神様まで祝つてあげなきゃなんないのよ。誰よ、どこぞのオッサンの誕生日を恋人達の思い出づくりに利用しようと考えたバカは」

オッサンってキリストのことだろうか。ずいぶん酷い言われようだ。しかしちよつと待て。それはどちらかと言えば独り身の僕みたいな奴がひがんで言うべき台詞ではなからうか。

彼女は珈琲を口に含み、無表情にカップの内側を見つめていた。果たしてあの砂糖の量は彼女にとって適量だったのか、その表情からはさっぱり読み取れなかった。

「それよりさつきから個人的に気になることがあるんだけど」

僕が言つと、彼女は睨みつけてきた。しかめつつらしても顔のバランスが整っている。妙な迫力がある。そんな事を考えながら、僕は今までの時間を水泡に帰すべく爆弾を投下する。

「初雪って年初めだっけ？」

「どういうこと」

「その冬初めての雪を初雪って言つのかと思つてた」
彼女がキョトンとする。

窓の外では雪が地面に薄い絨毯を敷きはじめていた。

休日に論ずる休日（前書き）

2009年のカレンダーを参照してください。

休日に論ずる休日

「振替休日ってどういうこと」

憤然として彼女は言った。5月の陽射しが机に反射し、彼女の顔面に陰影をつくる。

「どうもこうも」僕は一度彼女を見、また本の上に視線を戻す。

「世間は休日、大学も休講」

「それはさっき聞いたわ」

彼女は君が言ったんでしよう、と言わんばかりにビツと僕を指差す。

彼女が例によってこの空き部室に現れたのはつい先程のことだ。扉を開けるなり「どうして誰もいないの？」と宣った。どうやら通常通り授業があるものと思っていたようだ。そこで僕は今日が振替休日で休講である旨を簡潔に伝えた。

「何がどうして振り替えた訳？」

何がそんなに不満なのか、口を尖らせ彼女が言う。僕は仕方なく読みかけの本を閉じ、姿勢を正した。わざとらしく咳払いなんかもしてみる。

「いいかい、今年の『みどりの日』は日曜日だったんだ。だから今日はその代わりだ」僕が小学生に教えるようにゆっくり優しく簡潔に言くと、案の定彼女は眉間に皺をよせ、嫌悪感を露にした。

「そこまでして休みをとる必要があるの？」

確かに、今年は4月の『昭和の日』から丸々一週間がゴールデンウィークだった。僕らの学び舎たる大学が休みに挟まれている、というだけで何の休日でもない30日と1日まで休講にしまったからだ。長すぎるにも程がある。余りの長さに何をするのが最も有意義なのか計りかね、途方に暮れているうちに何もしないまま休暇を終えようとしている僕の気持ちも考えてほしい。

しかし。

「いいかい、日本では一年間にこれだけ休まなければいけない、と法律で定められているんだ。『国民の祝日に関する法律』という」

「はあ」彼女が気のない返事を返してくる。

「それには祝日が日曜日と重なった場合、翌日の月曜日が代わりに休日になることが定められている」

「へえ」

相槌を打ってはいるものの、彼女は相変わらずじっとりと僕を見る。いつの間にか向かいにあるパイプ椅子に腰を落着け、興味はないけど聞いてあげようかしら、という様子で頬杖をついている。

「ただ、去年と今年のゴールデンウィークは異例で、連休の最初が日曜日になってしまったから、水曜日に振替休日が来て、土曜日から数えて5連休になってしまったと」

「ふうん」

演説を終えても、彼女は一向に納得しないようだ。僕は溜め息をついた。

「いいじゃないか、休みが多くて。授業に縛られず好きなコトできるし」

「君は授業があるうとなかろうと此処でサボってるじゃないの」
「ごもつとも。」

「法律だかなんだか知らないけれど、そんなに休みばっかとおつてから学力低下だの日本の未来が危ないだのと言われてるんじゃないの」

青春を謳歌しているはずの女子大生が、連休一つで斯様なことを憂いているとは嘆かわしい。

「いつからそんな愛国主義者になったんだ？もう少し女子大生らしい発想を持ちなよ」

「そういうことは男子学生らしい生活リズムを整えてから言いなさい」

ぴしゃりと言い返された。今、日本中の引きこもりを敵に回した

な。

僕は椅子の背もたれに身を預けた。パイプ椅子の間接が軋む。

「休みが多いほどアイツと遊ぶ機会だって増えるんじゃない？何が不満なのさ」

アイツとは言わずもがな、僕の大学での唯一の友人でもある彼女の彼氏のことだ。ところが彼女は心底いぶかしげに目を細めた。

「何の為に？」

「は？」

「何の為にアイツと二人で連休を過ごさなきゃならないの。何のメリットが有るわけ？」

ちよつと待て、君たちはデートのひとつもしないのか？僕はぽかんと口を開けた。それこそ何の為に付き合ってるんだ。

「よくわからないけれど、それが彼氏彼女ってモノじゃないの？」

「誰がそんなコト決めたのよ」確かにそこまでは法律も縛ったりはしないけれど。

「少なくとも毎日会う必要はないもの」

あ、そういうことか。どうやら全くデートしない訳ではないらしい。僕は改めてまじまじと彼女を見る。不満に顔を歪めても尚整った顔立ち。今日は少し早い真夏日の為か、胸元の開いたシャツにミニスカートという出で立ちだ。ほっそりとした手足。アイツはよく彼女をモノにできたもんだと感心してしまう。

これで笑顔を見せるようになれば振り返らない男はいないだろうに、と思う。僕は未だに彼女の笑う顔を見たことがない。

「けれど意外だね、君はそんなに学校が好きだったの？」

笑顔と同様に、僕以外の誰かと話すのも見たことがない。人のことは言えないが、ちゃんと友達がいるのか常々心配していたのだけれど。

彼女はいつもの様につん、と口を尖らせ、窓の外を見た。

「別に」

「じゃあ何が不満なのさ」

「用もなく学校に来てしまったことで浪費された時間の虚しさを嘆いているのよ」

確かに無駄足もいいところだ。ミニスカートの裾から覗く彼女の白い足を見て、あながち無駄な足でもないよ、と言いそうになる。こらえる。

「でも、此処で僕と話してることの方が時間を無駄にしてる気がするのだけど」

彼女ははた、と伏せていた目をあげた。同時に窓の外で青葉が落ちていくのが見えた。

「話し相手になってあげたのよ」

心なしかさつきより険しい仏頂面を作って彼女は言う。

「君の為にわざわざ時間を無駄にしてあげたの。感謝してほしいものね」

吐き捨てるように言い切ると、がたんと音をたてて立ち上がる。

くるりと背を向け、足音高く部屋を出た。あっという間だった。

扉を閉める直前、彼女は振り返った。

「ところで君はどうして居る訳？」

「此処は僕の部屋であるも同然だからね」

僕は事も無げに言った。

「此処に持ち込んだのである本で、どうしても読みたいのがあったんだ」
彼女は一瞬、疑わしげに目を細めた。が、「ふうん」と言っただけをぴしゃりと閉めた。

僕は彼女の足音が遠ざかるのを確かめてから、ほっと胸をなでおろす。

だって、まさか言えないじゃないか。

生命に連なる討論

「虫つて可哀相だと思わない？」

彼女はぼんやりと壁を見つめながら言った。

7月も下旬、大学は試験期間に入っていた。生憎中庭には二羽二ワトリはいないようだけれど、代わりに無数の学生が二ワトリよりしく右往左往している。試験なんて余裕だから、と私用に急ぐ学生もいれば、なんとか単位を落とさないよう教授と同級生との間を奔走している（ように見える）学生もいる。

僕はと言えば、もともと少なかったテストが午前中で終わり、午後も特に予定がない。帰宅しても構わないけれど、屋外は気温32度の真夏日。どうせ涼むなら大学の電力を思う存分浪費してやろう、という魂胆でいつもの空き部屋にいつものように読書しようとやってきたところである。

しかしそこには先客がいた。

「人間には嫌われるし他の動物には食べられちゃうし」

本棚前のパイプ椅子に座った彼女が続ける。机に頬杖をつき、優雅に脚を組んでいる。窓はきっちり閉められ、真正面に位置するエアコンの風が彼女の前髪を揺らす。

僕は彼女の言葉には答えず、遠慮がちに言ってみた。

「…そこは僕の特等席なんだけれど…」

「他の動物はまだいいわよ」

華麗にシカトされた。

「…あのさ、」

「自然界は弱肉強食なもの。だけどね、」彼女の語り口は淡々としてはいるが、心なしかヒートアップしてきている。

「嫌悪感とか好奇心だとかで彼らを侮辱するのは人間だけなのよ」
そこまで言ってから、彼女はキツと僕を睨んだ。

「それってどうなの」

「そこまで人の話を聞こうとしないのってどうなの」

僕は諦めて扉側のパイプ椅子に座った。ここまで来たら彼女の話
を聞くしかなさそうだ。

「君が言いたいことはよくわかるよ」

「じゃあどうして冷たいお茶の一つも出して貰えないのかしら」

おいおい、と思わず僕は心の中で、彼女の彼氏である僕の唯一の
友人に問い掛けた。君は一体彼女の何処を好きになったんだい。

溜息をついて冷蔵庫から冷えた烏龍茶を出し、グラスに注いで彼
女の前に置いた。けれど彼女はそれを飲もうとはせず、腕を組んで
じつと睨みつけている。

そのまま何も言わないので、烏龍茶を一口飲んで、僕の方から話
の続きを切り出すことにした。

「確かに僕たち人間の虫に対する仕打ちは酷いかもしれない。虫
嫌いの目に止まれば問答無用で殺されるし」

彼女は強く頷く。

「研究家や子供の目に止まれば実験台にされたり観察されたりす
るしね」

「虫を劣っているものと決め付けて、『虫けら』なんて表現を生
み出す」

「そう」

「虫だってただ一生懸命に生きているだけなのに」

「そうよ、そうなのよ」

一体僕らはいつの間に昆虫擁護論者になったのか。

烏龍茶の氷が思い出したようにカランと音をたてた。相変わらず
彼女には口をつける気配はない。

「害があるモノはともかく、私達はどうして彼らを嫌悪するのか
しら？」

僕が質問を理解できず黙っていると、彼女は呆れたように僕を一
瞥して言い直した。

「どうして彼らに対して『気持ち悪い』って思ったりするのかし

ら」

「神様がそう創ったから」

「…私、貴方のそういうところ嫌いよ」

「それは光栄だね」

彼女はまた顔を正面のエアコンに向けた。今日はノースリーブのパーカーを着ている。夏なのに真っ白な腕と華奢な肩があまりに涼しげに見え、逆に心配になって寒くないか、と尋ねると無言でかぶりを振った。

「誰か一人でも、そこにいるだけで嫌悪される彼らの気持ちを考えたことがある？」 僕は先程から、彼女が『彼ら』という言葉を選んで使っていることを興味深く感じていた。彼女は虫をあくまで自分達と対等の立場で扱っているのだ。

「少なくとも今、君が考えてくれているじゃないか」

「例えばこれが人間だったら、多くの人は同情したりするのよ。人間が殺されたら犯人に対して憤ったりするのに、自分が踏み付けた虫にも遺族がいるかもしれないなんて夢にも思わないのよ」

「…そこまで考えて生きていたら疲れそうだけれど」

僕は彼女の凜とした横顔に見とれた。それは確かに綺麗だったけれど、畏れを感じさせる類のものだった。彼女の崇高な考えは素晴らしいけれど、少し異常に思える。

それは人間という生き物の傲慢に過ぎないのではないか。虫はきつと生きていくのに精一杯で、人間のように余計なことを考えるヒマなんてないのではないか。

それともそういう考えこそが傲慢なのだろうか。

余計なことを考えていたら訳がわからなくなってきたので止めた。代わりに彼女に言った。

「理不尽な理由で命を奪われるのはどんな生き物であれ同じだよ。虫も哺乳類も人類も平等にね」

彼女は僅かに目を見開いて僕を見た。前に何度か見た、まだあどけなさを残した表情で、まるで僕がここにいることに初めて気が付

いたように。

ああ、そうか、と思った。あいつは彼女のこういうところを好きになったのかもしれない。

「…そうね」彼女はまた視線を烏龍茶に戻した。

「大切なのは命の尊さを忘れないことよね」

一体いつの間にこんな重く恥ずかしい話題になったのか。

そこでチャイムが鳴り、休み時間の終了を告げた。僕が現実に戻ると同時に読書時間の喪失を嘆いているのも意に介さず、彼女は「帰る」と一言告げて立ち上がった。結局烏龍茶はびっしり汗をかいたまま、手をつけられることはなかった。

その時。

机上に濁音で始まる焦げ茶色の虫が、どこからともなくカサコソと現れた。

僕が「あ」と言う前に彼女が動いた。パーンと小気味の良い音が響き、次に机を見ると虫は平たくなっていた。彼女の手にはいつの間にか筒状に丸めたノートが握られている。

「…なんで？」僕が問うと彼女は顔を歪めた。

「だって、気持ち悪いじゃない」

さいですか、と僕は思った。多分、ここでそのノートは僕のだと言っても聞き入れてくれないんだろうな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4754m/>

僕らの方程式

2010年10月17日02時30分発行